

第7章 結論

1節 仮説の検証

われわれは第2章3節で、「協働」「自律」「活用」力を育てるプロジェクト型宿泊研修を実現するための仮説を立てた(小論10~11頁)。これは即ち2012年度のプロジェクト・キャンプおよび海外研修の指導方針でもある。両プログラムの実施とその振り返り、ならびに先進校視察や先行研究による知見をもとにこれらを次のように検証した。

①【生徒の興味関心によるテーマ決定】

データ上の根拠を示すことはできないが、生徒観察およびクラス・ミーティングの内容の深まりや、事後の報告会等の充実度からいって、間違いないという確信を持つにいたった。とりわけ問題解決学習にはそもそも問題の発見・疑問を持つことが極めて重要である。このためには、何よりお仕着せではなく自分の考え、自分の関心から始めることが肝要で、その後のプロジェクト推進の意欲にも大きく関わるからである。

②【テーマの近似性により自主的に行わせるチーム編成】

①と②は密接に関連している。生徒の興味関心により主体的にテーマを決定させた以上、探究のためのチームも同じようにつくられるのが必然である。すでに何度か述べたように、初回のプロジェクト・キャンプの反省を踏まえ、別の学年のPBLを指導して質の高いプロジェクトが生み出されるのを確認している。実際、2回目のプロジェクト・キャンプとなった2012年度と1回目との比較からも、生徒集団は異なるが、この仮説は間違いないと判断した。

なお、海外研修については実質的に全て個人プロジェクトであったため、検証していない。

③【自律性と思慮深さを育てるために、予測・仮説を立てて検証すること、実地調査やインタビューを必須とすることが必須】

殊に自ら計画し行動することと、実在する人物にインタビューを行うこと(そのためにアポイントメントを取ることも含む)は、自律性を育むために極めて有効であることは、アンケートからも生徒たち自身がそのように自覚していることが顕著に知られた。なお、予測・仮説を立てて探究的活動でこれを検証するという単純かつ一方向性の活動では、真の意味で思慮深さを育てることはできない。思慮深さとは、事柄に直面した困惑・疑惑の状況で、推測的予測ないし試験的解釈を行い、文字通り注意深く探究することで、試験的仮説を精密化し、これを検証するという営みを通して、試行錯誤と推論を繰り返す中で培われていくのである¹²。プロジェクト学習またはプロジェクト型宿泊研修では、「予想・仮説→探究→検証」という「型」を与え、その経験のくり返しの中で、らせん的に熟慮・熟考する習慣と力をつけさせると言った方が妥当であろう。

④【各段階での発表・ディスカッションでコミュニケーション力育つ】

構想発表・中間発表・報告プレゼンと、各段階での発表に、自分の学びや考えをまとめ、他者の取組みに学ぶという意義を感じていることは、生徒アンケートから顕著にわかった。さらに、プロジェクト

¹² 文献③上巻 239~240頁

推進中のクラス・ミーティングが、相互コミュニケーションを高めるのと協働性を高めるために重要であることが、改めて確認された。

以上に加えて、先進校視察および先進事例の研究等により次の事が分かった。

- 1) 個別のプログラムも大事だが、探究の方法について最初に系統的に指導することが大切であること。
- 2) 日常の学校文化の中に、探究ないし問題解決学習が存在することが重要であること。授業もそのように行われていること、学校の空気そのものが“探究的文化”に満ちていることが大切である。
- 3) 既存の教科との関連や、教科学習の内容を想起して問題解決に応用することが重要であること。これこそキー・コンピテンシーの一つ「情報・言語・技術の相互作用的活用」そのものである。
- 4) 海外で質の高い探究学習を行うことは、主として語学力の問題から困難であること。しかし、視野を広げること、自分と日本の社会を相対化して見つめることの経験は、大学まで見据えた教育全般の視点として極めて重要である¹³。

¹³ 尚絅学院大学では、毎年秋、NPO 法人国際子ども権利センター（シーライツ）主催の「カンボジア・スタディーツアー」に10名前後の学生が参加し、路上生活をする子どもたちの現実などと直面する。大学入学後早い段階でのこうした経験が、その後の学業や進路選択に非常に大きな影響を与えている。

2節 有効なプロジェクト型宿泊研修モデルの提言

以上、二種類のプロジェクト型宿泊研修の実践から、改めて日常の学校生活から離れ集中的に探究活動を行う宿泊研修は、プロジェクト学習にとって有効であると確信するに至った。そして分析と調査研究の結果得られた知見から、当初の仮説を検証し、「協働」「自律」「活用」力を育てるプロジェクト型宿泊研修指導のモデルを以下のように提言するものである。

- ①プロジェクト型宿泊研修を有効たらしめるためには、初期の段階で探究活動の意味と方法について系統的な指導がなされることと、授業を初めとする日常の学校教育の中に探究的活動が存在することが重要である。
- ②プロジェクト学習のモチベーションを高く維持するために、テーマは生徒自身の興味・関心により決定させるべきである。「ツールの相互作用的活用」というコンピテンシーのためにも、この段階で教科や既習事項との関連を意識させることが重要である。
- ③チームをつくってプロジェクトを推進する場合、探究意欲と協働性—コンピテンシーの一つ—を高めるために、予め定められたカテゴリーによってではなく、各々のテーマの近似した者同士で自主的に編成させるべきである。
- ④プロジェクトの取り組みは、徹底的に予測・仮説を立てて検証させるものとするが、これは仮説→検証という単純なものではなく、問題の発見→困惑・疑問→推論→探究→検証→推論→…と試行錯誤を重ねながら思考を深め、あるいは一般化していく作業であることが望ましい。このことによって思慮深さ（reflection、熟慮、反省的思考）が育てられる。
- ⑤探究の過程では、必ず実際に現場に行き観察したり、実在する人物にインタビューしたりする行動を重視する。これらの計画を立てて実行することや、他者との相互作用的なかわりは、「自律的に活動する」とコンピテンシーを育てるために有効である。
- ⑥事前学習から実施、事後まとめまでの各段階において、構想発表や中間発表、報告発表を行い、生徒同士のディスカッションを行う。これにより、自らの取り組みを要領よくまとめて他者に伝える力を育てると共に、他者の取り組みから学び、自己の取り組みを見直したり確認したりする双方向のコミュニケーション力を向上させることができる。
- ⑦教師は生徒の探究学習のアドバイザーとしての役割を担い、プロジェクトのテーマ設定からプレゼンテーションに至るまで、クラス全体のマネジメントを行う。常に生徒に寄り添い、注意深く学習の様子を観察し、タイムリーに適切な助言を行う。特に、テーマ設定とプロジェクトのまとめの段階は、教師によるカウンセリングが重要な意味を持つ。

これらに加えて、伝えたいことをまとめ、適切な言葉を用いて論理的に表現する言語力を育てることが重要であり、かつ課題でもある。また、学校での全ての学びが探究的文化に満ちていることが重要であり、そのような学校での学習をポートフォリオで生徒自身が振り返ることができるようにすることも有効と考えられる¹⁴。本校ではすでに総合的な学習で実践しており、これと学習および特別活動の全体を繋げる取り組みは今後の課題としたい。

¹⁴ 文献⑧182頁以降